



「人間関係を学ぶ～寛容性を土壌として」

研究所員 蒲地 啓子

紫陽花が梅雨空に彩りを添えてくれています。紫陽花の色は、紫陽花が元来もっているアントシアニンという色素が、その植えられた土壌の性質によって変化して発現するものだそうです。アルミニウムが多く含まれる土壌なら青色に、アルミニウムが少なければピンクから赤に近づくのだそうです。因みに我が家には白い紫陽花がありますが、それはもともとこのアントシアニンという物質をもたない種類なのだそうです。

幼児期に、保護者や教師という身近な人との安心したかかわりは、その後の人間関係の広がり土台をつくります。子どもの興味関心に合わせ、人とのかかわりの楽しさや心地よさを十分に味合わせることがその基盤となります。

学齢期になって、周囲の友達との安定した人間関係を築くためには、相手とのかかわり方のルールを身に付けることが必要になります。人間関係のルールを知らなかったり、人の気持ちを想像したり、相手の立場でものを見る体験の少なかったりした子どもたちは、相手との間で起きている葛藤に気づくことが難しく、トラブルや誤解が起こってしまいがちです。これらの問題は、多かれ少なかれすべての子どもが通る道で、起こった問題を年齢相応に解決することを通して、相手との関係性やその作り方を学びながら、社会の中の暗黙のルールを経験の中から身につけ、成長していきます。

これらの暗黙のルールが分かりにくいことによって、人とのかかわりで苦戦する子どものために、「自立活動」の中で、生活の中で起こる葛藤場面を切り取って人間関係づくりを学ぶ機会を設けています。自立活動は6つの区分があり、前回の学習指導要領で新たに加わった、「3 人間関係の形成」の中の、他者の意図や感情の理解、自己の理解と行動の調整、集団への参加の基礎などの内容がそれにあたります。これらの教育活動では、例えば表情カード等を使って人の表情と感情の関係を学んだり、ロールプレイングや劇等を通して、人の表情や声の抑揚を感じながら他者の意図や感情の理解を図ったりします。VTR やコミック会話、4コマ漫画等を使い、話の流れに沿って自分で考えて台詞を入れたりする活動を通して、人の感情と場面との関係等を学びます。その時の感情を視覚的にフィードバックすることで、その時の感情を後で振り返りに使うことができます。

また、体育や音楽等の集団での活動を通して、友達と一緒に手をつなぐ、動きを合わせるなど、一緒に楽しく活動する場面を用いて、経験の中で自分の行動を相手や集団に合わせて調整する力を養います。さらに、校外学習等に向けて、事前に小集団で順番を待つ練習をしたり、車内でのルールやマナーを理解し、活動当日にも自分で確認しながら集団活動へ参加できる自信を持たせたりする活動は、集団への参加の基礎を養います。

これらの活動は、子どもたちが集団によく適応すること、社会参加への基礎力を養うことを目指して、学校教育の中で行われています。しかし、これらはあくまでもいくつかのパターンを模擬的に体験しながら学んでいるにすぎません。

苦戦する子どもたちがこれらの学びを自分のものとして使えるようになるためには、実際の生活の中での多くのうれしい感情交流と、理解されない挫折の体験が繰り返されることになるのかもしれませんが、となれば、これらの子どもたちの心がいつも前向きでいられるように、寛容に包み込む子ども集団や社会をつくりあげていくのも、私たち大人の役割となります。

コロナ禍で人と人との直接的な触れ合いやつながりが希薄になり、分断の社会とも評されるような時代です。多様性を認めるという寛容さを土壌として、子どもたちに個性豊かな色合いの花を開かせたいものです。

参考までに、紫陽花の花言葉は色によって異なり、ピンク～赤紫の紫陽花の花言葉は「元気な女性」、青～青紫の紫陽花の花言葉「辛抱強い愛」、白の紫陽花の花言葉は「寛容」だそうです。

蒲地 啓子（かまち けいこ） 帝京大学大学院教職研究科 准教授



横浜市立小学校教員を経て、横浜市教育委員会指導主事、横浜市立小学校長、横浜市教育委員会課長等として、主に不登校児童生徒や発達障害のある子どもたちを支援する横浜市の専門教員である児童支援専任教諭（校内で特別支援教育コーディネーターと児童指導担当を主に担う）の育成にかかわってきました。また、横浜市教育相談センターで不登校問題に、またスクールソーシャルワーカー運用事業にかかわり、様々な角度から子どもたちを支援する仕事に従事してきました。

公認心理師、学校心理士